晋宋革命と江南社会

葭森健介

【要約】晋宋革命は、貴族制社会の最盛期に起った東晋から宋への王朝革命である。従来の研究では貴族、国家の側からのみ考察され、郷村社会の動向は軽視されてきた。しかしながら、この革命における郷村社会の役割は重要であった。東晋末、国家権力を利用した司馬道子等一部北人貴族の私的収奪に対する郷村社会の不満は頂点に達していた。その結果郷村社会から起ったのが孫恩・盧循の乱である。この状況に対し改革を図った北人貴族の王恭や軍閥の桓玄は、郷村社会の不満を解決できず、郷村社会の支持を失った結果失敗した。これに比べ、一寒門武人であった劉裕は、土断を中心とする郷村社会安定策を推進し、郷村社会をリードする南人土豪の支持を受けて、王朝革命を成し遂げた。すなわち、郷村社会こそ晋宋革命を動かし、南朝的皇帝権を生み出した原動力であり、ここに見られる南人土豪の活躍は寒門寒人の政界進出の先蹤となるものであろう。

史林　六三巻二号　一九八〇年三月

一　問題の所在

三～九世紀にかけての中国を特徴づける政治社会体制は貴族制という言葉で表現される。この体制は、後漢末の混乱の中から生み出され、西晋に至り揺ぎないものとなった。西晋は北方異民族の侵入を受けて亡び、華北は混乱に陥ったものの、貴族制は江南の亡命政権東晋のもとで再生され、最盛期を迎える。こうして再生された貴族制は東晋から南朝へと受けつがれるが、晋宋革命はその際に起った王朝革命である。だがこの革命は、貴族の反乱、民衆反乱、軍閥によるクーデターといった、様々な階層の反東晋活動が続いた末、華北の異民族諸王朝に対峙して置かれた北府軍の一部将劉裕によって成就されたもので、王朝革命ということばで看過しえない深刻な様相をあらわしている。

ところで、東晋の貴族制再編に際して中心となったのは華北から流亡して来た名門貴族（以下北人貴族あるいは単に貴族と呼ぶ）であり、彼等が東晋政権の中枢を占めた。これに対し、東晋成立以前から江南に住み、在地で大きな勢力を蓄えていた豪族（以下南人土豪あるいは土豪と呼ぶ）は、身分的には北人貴族より一段低くみられ、権力の中枢からも疎外されていた。[1] 晋宋革命においてもこの二つの勢力の存在は無視できない。又、この時揚子江以南で、この地方としては中国史上最初の民衆反乱が起った。このことから推測すると、東晋貴族制の底辺に位置づけられる江南郷村社会に何らかの動きがあった様に思われる。これらの点を念頭に置きながら、まずは晋宋革命が従来どの様にとらえられてきたのか、先学の研究を振り返ってみたい。

この問題を本格的に論じた最初の研究は、越智重明氏によるものである。氏は東晋、宋両政権が共に貴族政権であるという観点に立って劉裕政権が純然たる武人政権から貴族政権へと変化する過程として晋宋革命を考察する。特に、劉裕政権が実施した義熙土断が貴族層の支持を取りつけるのに重要な役割を果したとして、この政策に重点を置いて論じている。氏によれば、土断により国家の「民庶」把握は強まり、徭役労働力が増加し国家財政が充実した。劉裕はこれを背景に北人の宿願である中原回復を成功させて声望を高めた。土断はまた後述する蔵戸の摘発を伴って行われたため、その経済的実力によって北人貴族の政治支配を脅かす南人土豪に打撃を与える結果となった。これにより、劉裕は北人貴族を政権内に組み入れ、南人土豪勢力を排除していった。だが同じ貴族政権とはいえ東晋と宋には違いが見られる。その一つは南人土豪に代表される「豪族的官僚貴族」勢力が激減し、「寄生的官僚貴族」勢力が中央官界を牛耳るようになったことである。[2] 又、北人貴族は、華北の旧居住地で形成された地縁的結合を、南下後も維持しており、彼等のために白籍と呼ばれる特別な戸籍が設けられていた。だが、土断によって白籍は廃止され、従ってその地縁的結合も制度的には否定された。これらのことが彼等の政治的軍事的能力の喪失、均分相続制による貴族の「家」のたえざる分裂現象と相俟って、皇帝権の絶対化を生んだと述べる。[3]

これに近い考え方をもつのが石田徳行氏である。氏は北府出身の寒門武人からなる劉裕集団が劉宋政権へと成長する際の権力構造の変化に注目する。そして、劉裕がかっての同志であった寒門武人、東晋皇室勢力、豪族勢力を排除し、貴族層を意欲的に自らの権力機構に組み込み軍事的色彩の濃厚な集団を政権的性格の集団へと変質させることにより禅譲革命を成し遂げた。さらに、この禅譲革命で活躍したのは北人貴族であって、寒門武人は台頭の兆しを見せたにすぎないと述べる。④

又、矢野主税氏は西晋では顕著であった南北人の対立が東晋以降次第に弱まり、義熙土断を機に北人の江南土着化が促進され、北人南人が一体となって北朝諸政権に対する封鎖的な世界を形成したとして、それを南朝成立の意義とみなす。そして、それ以後問題となるのは、政治権力をめぐる一流貴族と二流貴族の対立、執権グループとそれに迫るグループの対立であり、その間隙に、強力となった皇帝権が介入してくると指摘し、この様な社会体制を第二次門閥社会と呼んでいる。⑤

以上各氏の見解に共通することは、晋宋革命が主として貴族、或は国家権力といった、支配権力の上層部分との関連でとらえられていることである。特に越智、石田両氏はその過程を劉裕が北人貴族の支持協力を受ける過程として解釈し、南人土豪の役割をネガティヴなものとしてしかとらえていない。結局、貴族制の根幹にあるはずの郷村社会の動向は軽視され、この時起った大規模な民衆反乱である孫恩・盧循の乱も射程外に置かれている。この点、以上三氏とやや異なるのが川勝義雄氏である。

氏は東晋において再編された六朝貴族制の崩壊の過程として晋宋革命をとらえ、貴族の軍事支配権喪失に注目する。つまり、東晋末に貴族層から起った王恭の乱でキャスティング・ヴォートを握っていたのは、もともと貴族の傭兵のような存在にすぎなかった北府軍の寒門武人であり、この事件以後彼等は独自の意志で動く様になった。この様にして貴族のもとをはなれた軍事力が自己発展を遂げた結果生まれたのが劉宋政権であるとする。⑥氏はまた、東晋末には江南土豪層とそ

の背後にある広汎な江南農民の東晋支配に対する不満が鬱積していたことを指摘する。その結果起った孫恩・盧循の乱によって貴族支配体制は動揺し、軍事政権ともいうべき劉裕政権が生まれた。劉裕の北伐等を契機とする江南を中心とした新しい秩序回復の動きは、民衆の不満を新政権への期待へと転化させた。実際に、土断を実行し、当時賤民化しつつあった兵戸を解放したことは、抑圧された階層の不満を解消するのにかなりの効果をあげたであろうと推測している。⑦

川勝氏のこの見解は劉宋政権の非貴族的要素を重視したこと、土豪、民衆の動きを視野に入れていること等の点で前出の諸氏とは異なる。だが、氏の所説もどちらかといえば貴族体制の変化の方に重点がある。氏は、東晋末の民間にどの様な不満が鬱積しており、土断や兵戸の解放等の政策がいかにして不満を解消したのか、人びとが新政権に何を期待していたのか等の点については積極的には明らかにしていない。また南人土豪に関しても、劉宋政権の成立過程において、彼等は豪族としてでなく、もっぱら個人の才幹によって個々の寒門武人としてその軍事体系の中に吸収されていったとする。要するに、南人土豪や民衆を旧体制にゆさぶりをかける存在と見るにとどまり、新体制を生み出す力とは認めておらず、南人土豪の活躍もその在地にもつ豪族的実力によるものとは見ず、一個人の才幹を基盤としたものとしてしか評価していないのである。

以上先学の晋宋革命に関する研究を振り返ってみたが、いずれも統治階級内部の力関係の変化の方に力点が置かれ、政権の基礎をなす江南社会を担った南人土豪・民衆の動向は軽視されている。

ところで、南朝の王朝革命研究の中で郷村社会の動向に論及したものとしては、斉梁革命に関する越智氏の指摘、及び宋斉、斉梁両革命についての安田二郎氏の研究が注目される。⑧越智氏は、雍州の長官であった蕭衍が革命に成功した理由の一つは、州内の郷村社会の有力者を属僚として掌握したことにあると指摘する。⑨蕭衍が皇帝即位後行なった天監の官制改革もこの様な郷村社会の有力者（氏のいう「次門層」）の台頭がその背後にあったとする。⑩しかし、氏の論点の中心は、あくまでも皇帝となった蕭衍の側にあり、「次門層」の役割も従属的な地位にとどめられている。これに対し安田氏は郷村

社会にあって「望族的あり方」をしていた豪族が、斉の蕭道成、梁の蕭衍集団の中核を構成し、これらの革命で積極的な役割を果したと指摘している。[11] ところが先に述べた通り従来の晋宋革命研究では、安田氏の指摘する様な在地勢力の革命に対する積極的な働きかけはなかったとされている。そして、斉梁革命については在地勢力の役割を認める越智氏も、晋宋革命においてはこれをネガティヴなものとしてしかとらえていない。[12]

しかしながら、この時南人土豪に率いられた数十万の民衆が孫恩の反乱に参加した事実を考えると、晋宋革命も郷村社会の動向を抜きにしては語れない様に思われる。そこで次章以下、郷村社会とそれをリードする南人土豪が置かれた立場、及びその動向に注目し、晋宋革命に再検討を加え、新しい南朝貴族体制創出の過程を考察したい。

① 従来の東晋南朝貴族制研究では対立概念として貴族と寒門が用いられてきた。さらに北人南人の中にも貴族と寒門の別があったとするのが今までの常識である。にもかかわらずあえてここで北人貴族と南人土豪を対比したのは、その土着性、郷村社会とのかかわりによる違いを重視したからである。詳しくは次章を参照されたい。なお本稿で南人を土豪と呼んだのは、『資治通鑑』巻一一三に南人の有力者孔季恭が「土豪」と記されていることからヒントを得ている。

② 越智重明「劉裕政権と義熙土断」(『重松先生古稀記念九州大学東洋史論叢』所収、一九五七)

③ 越智重明「漢六朝史の理解をめぐって」(『九州大学東洋史論集』五、一九七七)等参照。

④ 石田徳行「劉裕集団の性格について」(『木村正雄先生退官記念東洋史論集』所収、一九七六)

⑤ 矢野主税「白籍と土断——南朝の成立——」(『史学雑誌』七九—八、一九七〇)、「南朝における南北人問題——南朝の成立——」(『長崎大学教育学部社会科学論叢』一九、一九七〇)、「南朝における婚姻関係」(同前二二、一九七三)等参照。

⑥ 川勝義雄「劉宋政権の成立と寒門武人——貴族制との関連において——」(『東方学報』京都三六、一九六四)

⑦ 川勝義雄「中国前期の異端運動」(『異端運動の研究』京都大学人文科学研究所刊所収、一九七四)

⑧ そのほか、東晋南朝の王朝革命全体を論じたものとしては、禅譲という王朝革命の形式のもつ時代性を検討した宮川尚志氏の研究(「禅譲による王朝革命の研究」『六朝史研究——政治社会編——』日本学術振興会刊所収、一九五六)、及び軍人出身の皇帝と貴族との王朝革命における関係についての宮崎市定氏の指摘(『九品官人法の研究』第一編、東洋史研究会刊、一九五六)がある。

⑨ 越智重明「州将蕭衍の挙兵をめぐって」(『軍事史学』九、一九六七)

⑩ 越智重明「梁の天監の改革と次門層」(『史学研究』九七、一九六六)

⑪ 安田二郎「蕭道成の革命集団——淮陰時代を中心として——」(『愛知県立大学文学部論集』一般教育編二一、一九七〇)、「南朝の皇帝と貴族と豪族・土豪層——梁武帝の革命を手がかりに——」(『中国中世

史研究』東海大学出版会刊所収、一九七〇）。氏はまた、宋末に起きた晋安王子勛の乱の背景にも封鎖的な南朝門閥貴族体制を打破しようとした豪族・土豪が存在していたことを、別稿で指摘している。（「『晋安王子勛の叛乱』について――南朝門閥貴族体制と豪族土豪――」『東洋史研究』二五―四、一九六七）

⑫ 晋宋革命についての言及は、他に孫恩・盧循の乱研究、本籍地任用の側からも部分的になされている。孫恩・盧循の乱研究については第五章を参照されたい。又、本籍地任用の側からは、王朝革命の混乱時に国家権力が、土豪の軍事力等の在地における勢力を利用して局地的安定を計り、その代りに土豪の在地での支配を認める形で彼等を国家体制にくみ入れたと指摘されている。しかし、これらは国家権力の側からの視点で論じられたものであり、土豪の自律的動きには積極的に触れられていない。なお王朝革命における本籍地任用については以下の論文がある。小尾孟夫「南朝における地方支配と豪族」（『東方学』四二、一九七一）、窪添慶文「魏晋南北朝における地方官の本籍地任用について」（一）、（二）（『史学雑誌』八三―一、二、一九七四）、越智重明「南朝の貴族と豪族」（『史淵』六九、一九五六）

二　北人貴族と南人土豪

西晋の滅亡後、身一つで華北から江南へ流亡してきた北人貴族は、かって江南で孫呉政権を盛りたて以後も江南に勢力を張っていた南人土豪を圧倒し、東晋政権の中枢を掌握した。この南人土豪と北人貴族との関係について越智氏はつぎのように述べる。北人貴族と高位にある南人土豪とは基本的には支配者として庶民に対する「距離感」を等しくし、貴族にふさわしい教養を具有する点でも共通するものを持っていたが、寄生官僚色の濃い北人貴族は南人土豪の政治的台頭に脅威を感じ、官職をめぐって両者は対立しつづけたと。[1] けれども、古くから江南の地に住む南人土豪と新たに流亡してきた北人貴族とが本当に江南に住む庶民に対して「距離感」を等しくすることがありえたのだろうか。さらに、両者の対立は官職をめぐる争いだけで片付けられるものだろうか。この点について両者が国家及び郷村社会に対してそれぞれどの様な立場にあったのかまずみておきたい。

東晋成立期において社会的経済的実力が欠如していた北人貴族は伝統的権威ないし文化的先進性等を背景とした政治的文化的能力によって社会的経済的実力でまさる南人土豪を押えて東晋権力の中枢を占めた。[2] 東晋末にもなると北人貴族も

まとまった荘園や私属民をもつに至ったことが知られている。[3] しかし、貴族や土豪の郷村社会における実力について論ずるには、単に土地や私属民の所有の問題だけでは不十分であろう。つまり、その周囲にいる小農民や[4]他の土豪との関係がむしろ重要になってくる。

たとえば、東晋初に南人土豪の顧栄や賀循が「此土の望」として政府に迎えられ、顧衆が「州里の宿望」として東晋政権に迎え入れられた事実が注目される。[5] この「望」を支えていたのはいったいどの様な人びとであろうか。また「望」とは彼等のいかなる行為に対して与えられたものであろうか。

こうした点を考察する時想起されるのが、従来よく論じられてきた災害時の賑恤という行為である。[6] 東晋においても「歳饑(みのり)うるを以て家米を運び、以て窮乏せしものを振(にぎ)わし、百姓之に頼」ったという会稽の孔坦、[7]「孫恩の乱の後に及び、東土飢荒し、人びと相い食」んでいた時、「家糧を散じて、以て邑里を賑わし、活くるを得る者甚だ多く、子を生むもの、皆孔を以て名と為」したという呉郡の顧琛の母孔氏、[8]「荒年を経れば其の財を散じ、郷里を救贍し、遂に貧罄の全済せし者甚だ多し」という永嘉の大族張進之等[9]の行為が目につく。更に彼等の中には、一族の「劫首となるもの数十人」が人びとに迷惑をかけているのを見て「一時に之を殺」したという沈慶之、[10]息子が「私財甚だ豊かにして、郷里の土庶多く其の責(しやつきん)を負」っているのに対し、その文券をすべて焼きすて、返済に及ばぬことを宣言した顧顗之、[11]弟・従弟が「頗る産業を営」んでいるのをきびしく戒め、その財物を焼き払った孔顗[12]の様に、たとえ親子・兄弟・一族であっても兼併等によって郷里社会の人びとの生活を脅かす様な行為については厳しい態度で臨む者もいる。南人土豪の郷里における「望」とはこの様な行為が前提となっていたと思われる。

この様な土豪と郷民との日常的な結びつきは戦乱時になると軍事力という形で顕現される。西晋末の混乱に際して義興の周玘は「郷里の義衆を率い合」せて、自分の県に攻め込んで来た反乱軍と戦い、[13]東晋初の軍閥王敦の乱では会稽の虞潭が「本県に於いて、宗人及び郡中の大姓を招合し、共に義軍を起」している。[14] そしてその時、呉郡の張茂の妻陸氏が「家

産を傾け、（張）茂の部曲を率いて先登と為」ったこと[15]からも窺える様に、義軍を起す際には自分の家産を投げうってまでしてその費用にあてたと推測される。

この様に、南人土豪は小農民や土豪から成る郷里社会の人びととの関係の中でその安定に気を配り、そこから生まれる郷里社会における信望を背景に中央政界での地位を築いている。そして彼等はその影響力を保持するためしばしば自己の家産まで犠牲にしている。つまり彼等の郷里社会における影響力は、土地や隷属民の私的所有にもとづく経済的実力から直接生じたものではないように思われる。その経済的実力は、人びとの信望を得る手段の一つとしてはたらいたと見るべきであろう。

この様な南人土豪に対して北人貴族に支えられた東晋国家権力は容易に手出しできなかったらしい。このことは蔵戸の摘発という問題からも窺われる。有力な南人土豪は逃戸を自己の庇護の下におき私属民とした。これを蔵戸というが、これに対し東晋初期に会稽余姚県令となった山遐は「蔵戸を以て棄市に当」る県人の虞喜を捕えんとしたが、逆に現地の「豪強」の反発を受けて罪に落とされ、官職も剝奪された。[16]又、前秦苻堅の大軍の侵入をくいとめた名宰相謝安も、「宜しく舎蔵（蔵戸）の失を糺すべし」との意見には、「厚徳を以て物を化し其の煩細を去る」という彼の政治方針に沿ってこれを拒絶している。[17]この様に南人土豪は国家権力からある程度独立した支配権を郷里にもち、東晋国家権力も力でこれを抑えこむことはできなかったと思われる。

これに比べ北人貴族の場合はどうだろうか。彼等が南人土豪ほどでないにせよかなりの広さの土地を所有していたことは既に明らかにされている。しかしその所有地は、三呉の山間部や揚子江北部の開墾地等の特定地域にほぼ限定され、しかも一つの家の所有地が一個所に集中しているのでなく、各処に散在していたといわれる。[18]こうした荘園は貴族的趣味生活の充足や自給自足を目的として営まれた。荘園の中に豊かな山水がとりこまれていたり、自家消費のために果樹が植えられたりしているのはその表れである。[19]従って、彼等北人貴族が江南土着の民衆と接触する機会は当然少なかったと思わ

れる。史料的に見ても、南人土豪が郷村社会において結んでいた様な私的隷属民以外の人々との関係は、北人貴族の場合、後述の王薈・王廞父子の例を除いてはほとんど見当らない。勿論彼等は越智氏の言う様に、東晋皇帝権力と一体感をもち、南人土豪よりも寄生官僚的性格を濃厚に有していたことは確かであり、[24] 東晋政権の中枢を牛耳っていたのも彼等である。しかし、何といっても彼等は身一つで華北から流亡して来たのであり、朝廷より官禄・食封・賜与等を受けていたにせよ荘園を経営するだけの資力を蓄えるのは並大抵ではなかったであろう。そのためか東晋初、名門中の名門である太原の王述などは「家貧しく、宛陵の令に試させらるるを求め、頗る贈遺を受けて家具を修」めている。[25] この就官に随伴する贈遺など、正規以外の収入は、彼等にとって看過できない蓄財の手段であったと思われる。それが行きすぎれば当然重大な社会問題をまきおこしかねない。

事実この傾向は次第に助長され、東晋も末期に近い太元年間（三七六～三九六）に至ると、民衆の生活を脅やかすものとして官僚の不正がさかんに議論されるに至る。たとえば、北人貴族の劉波はこの問題について次の様に述べる。

今、政煩しく役殷んにして、所在凋弊し、倉庫は空虚にして国用傾竭し、下民は侵削され流亡相い屈る。略ぼ戸口を計るに、但だ咸安（三七一～三七二）已来、十分して三を去る。……（中略）……告時職を乞う者は家弊なるを以て辞と為し、窮れるを振い滞れるを恤む者は公爵を以て施と為す。古は百姓の為に君を立て、之をして司牧せしめ、今は百姓以て君に恤み、之をして蚕食せしむ。

（『晋書』巻六十九劉隗附伝波伝）

又、名族出身の范寧も方鎮（地方軍管区長官）の腐敗について次の様に指摘する。

又、方鎮の官を去るもの皆精兵器仗を割きて以て送故と為す。米布の属は称計すべからず。……（中略）……送らるる兵の多き者は千余家を有するに至り、少き者も数十家なり。既に力私門に入り、復た官廩の布を資す。兵役既に竭くれば、枉げて良人を服せしめ、牽引するに端なく、以て相い充補す。（『晋書』巻七十五范汪附伝寧伝）

これらの例から察すると、家の貧窮、官位昇進の滞りを理由として官職や爵位が授受されたり、方鎮の長官が送故の名

目で公の軍隊を私兵とし、それを国家の費用で養ったりされており、国家機構が私的な利財追求の手段と化したといっても過言ではあるまい。そしてそれによる弊害は偏に税役の負担者たる編戸のもとへしわ寄せされた。この当時華北からの流亡民は先述の白籍という特別な戸籍に附されて徭役が免除され[22]、有力者の下の私属民にも国家権力の人戸把握の手が及んでいなかったことから、特にひどい搾取を受けたのは江南土着の小農民であったと思われる。東晋末の社会の混乱の芽はこの様な中で次第に譲成されていった。

「晋中興より以来、治綱大いに弛む。権門并兼し、強弱相い凌ぎ、百姓流離して其の産業を保つを得ず」『宋書』は巻二武帝紀中で東晋末の社会状況についてこの様に述べる。国家権力と結びついた権門の横暴はここに至って極点に達した。しかし、この混乱への対応のしかたも、郷村社会を存立基盤とする南人土豪と東晋国家権力と結びついた北人貴族とでは自ずと異なっていたのではないかと推察される。ここで東晋末の社会についてさらに詳しく見ておきたい。

①　越智重明「南朝の貴族と豪族」前出。

②　川勝義雄「孫呉政権の崩壊から江南貴族制へ」（『東方学報』京都四四、一九七三）

③　唐長孺『三至六世紀江南大土地所有制的発展』（上海人民出版社刊、一九五七）、大川富士夫「東晋南朝時代における山林叢沢の占有」（『立正史学』二五、一九六一）等参照。

④　ここでいう小農民とは有力者の下にある「奴客」、「僮僕」、「佃客」等の私的隷属民とは異なり、自らの所有する土地を耕す一般の農民を想定している。彼等は国家の税役を自ら負担しており、史料には「編戸」という語で表現される。なおその実態については高橋徹氏の指摘（「六朝江南の小農民」『史潮』一〇七、一九六九）がある。氏によれば、彼等は数十畝（漢代の百二十畝程度に相当）の土地を単婚小家族で耕していたという。

⑤　「及徙鎮建康、呉人不附、居月餘、士庶莫有至者、（王）導患之、……（中略）……導因進計曰、……（中略）……顧荣賀循、此士之望、未若引之以結人心、二子既至、則無不来矣」（『晋書』巻六十五王導伝）、「（何）充以（顧）衆州里宿望、每優遇之」（『晋書』巻七十六顧衆伝）

⑥　安田氏は「望族的あり方」をする豪族の郷里社会の保護者としての行為の一つに賑恤行為をあげる。（前掲第一章注⑧諸論文参照）、又、谷川道雄氏は、北朝の士大夫達がふまえていた郷党社会の生活倫理として軽財好施を重視し、隋唐帝国へとつながる新貴族主義運動を荷った士大夫がこれを実践したことを指摘している。（『隋唐帝国形成史論』筑摩書房刊、一九七一、『中国中世社会と共同体』第Ⅲ部、国書刊行会刊、一九七六等参照）又、小尾孟夫氏は救邺の研究の中で国家以外に富裕な人々による私的救済があったことを指摘し、それは彼等が自己の存立基盤である郷里社会の保全、かつ支配強化をはかったものであろうと述べる。（「南朝における救荒策について」『広島大学教育学部紀要』二部二二、一九七四）

⑦『晋書』巻七十八孔愉附伝坦伝
⑧『宋書』巻八十一顧琛伝
⑨『宋書』巻九十一張進之伝
⑩『南史』巻三十七沈慶之伝
⑪『宋書』巻八十一顧覬之伝
⑫『宋書』巻八十四孔覬伝
⑬『晋書』巻五十八周処附伝玘伝
⑭『晋書』巻七十六虞潭伝
⑮『晋書』巻九十六張茂妻陸氏伝
⑯『晋書』巻四十三山濤附伝遐伝
⑰『世説新語』政治篇注引『続晋陽秋』
⑱唐長孺『三至六世紀江南大土地所有制的発展』前出。
⑲大川富士夫「東晋・南朝時代における山林叢沢の占有」前出。
⑳越智重明「南朝の貴族と豪族」、「漢六朝史の理解をめぐって」（共に前出）等参照。
㉑『晋書』巻七十五王堪附伝述伝
㉒越智重明『魏晋南朝の政治と社会』第二編第二章（吉川弘文館刊、一九六三）等参照。

三　東晋末の社会

三八三年、宰相謝安の甥にあたる謝玄の率いる東晋軍は、淝水において百万と号する前秦苻堅の軍をうち破り、東晋建国以来最大の国難を回避することに成功した。これにより「近ごろ孝武の末は天下事なく、時和し年豊かにして、百姓業に楽しむ。すなわち自ら穀帛は殷阜にして、家は給し人は足るに幾し」という太平の世が到来する。[1] が、一方では権門の兼併はやまず、中央政治も次第に乱れてきた。名宰相とうたわれた謝安の死後実権を握ったのは、時の皇帝孝武帝の弟司馬道子である。彼の周囲は息子の司馬元顕、皇族の司馬尚之・恢之・允之兄弟、北人貴族の中でも人望の薄い王愉・国宝・緒兄弟、及び恩倖の張法順、趙牙、茹千秋等によって固められ、孝武帝も政治から遠ざけられて司馬道子の独裁体制が成立した。その下にあって官僚の綱紀はゆるみ奢侈の風潮がひどくなり、売位売官の様に国家機構が不正に運営され、尼僧や恩倖達が政治に嘴をさしはさむ様になった。[2]

中でも司馬道子は「功用鉅万」を用いて東第を築くなど豪奢淫逸な生活を送って政務を滞らせ、息子の元顕も国家危急の時に際してもなお「聚斂して已まず、富帝室を過ぐ」ありさまであった。[3] 又、王氏兄弟で最も権勢を振った王国宝は、東

晋中期の重臣王坦之の子、范寧の甥、謝安の女婿という当時最高の身分的地位にありながら、「少くして士操なく、廉隅を修めず」という性格から貴族内でも評判が悪く、官にあっても「貪縦にして聚斂するに紀極を知らず、後房の伎妾は百を以て数え、天下の珍玩は室に充満す」という生活を送っていた。④そして、恩倖たちも「官を売り爵を販い、資貨を聚むること億を累」ねたり、地方官として「贓私狼籍」をはたらいたり、道子の奢侈生活に奉仕したりした。彼等の出自は茹千秋が銭塘の捕賊吏、趙牙が優倡という様に低い身分であったが、「賂謟」によって昇進したものである。⑤会稽の張法順もまた廬江太守であったが、「刀筆の才を以て元顕の謀主と為」り、司馬尚之からは「駆走の小人」と罵倒される存在であった。⑦つまり、彼等は南人土豪と同じく江南の郷村社会の中から出て来たのであったとしても、南人土豪の様に郷里社会の名望家として存立するのでなく、「賂謟」「刀筆の才」というような、財力や事務能力で国家権力と直接結びつくことでその地位を得たのである。この様な恩倖の出現は、東晋以来江南社会が成長してきた一つの結果ともいえよう。

だが、以上の様な一部北人貴族や恩倖の国家機構を私した収奪、換言すれば「権門の并兼」は、郷村社会、特に国家の徭役負担を一手に引き受ける江南の小農民の生活を脅かした。これは郷村社会を自己の存立基盤とする南人土豪にとっても危機的状況であり、彼等の間にも不満が渦巻いていたに違いない。事実、呉興の聞人奭は「穀賤くして人饑え、流殣絶えざるは、百姓単貧にして役調深刻なるに由る」と、豊かなはずの東晋末の郷村社会が混乱に陥っている原因を政府の失政に帰している。⑧また許栄も、王国宝の度をすぎた僧尼への尊信が「百姓を侵漁し」ている事実を非難している。⑨晋宋革命の際に登場した指導者たちが、この郷村社会の混乱をいかにおさめ、そこに住む人びとの不満をどの様にして解決しようとしたかを明らかにすることこそ、晋宋革命を理解するポイントではないだろうか。以下この点を中心に晋宋革命の展開をみてゆきたい。

① 『宋書』巻五十六孔琳之伝

② 「于時孝武帝不親万機、但与（司馬）道子酣歌為務、�姆尼僧、尤為親暱、並竊弄其権、凡所幸接、皆出自小竪、郡守長吏多為道子所樹立、既為揚州総録、勢傾天下、由是朝野奔湊、中書令王国宝性卑佞、

特為道子所寵昵、官以賄遷、政刑謬乱」（『晋書』巻六十四簡文三子伝）

③『晋書』巻六十四簡文三子伝

④『晋書』巻七十五王堪附伝国宝伝

⑤「娶人趙牙出自優倡、茹千秋本銭塘捕賊吏、因賂謟進……（中略）……牙為道子開東第、築山穿池、列樹竹木、功用鉅万……（中略）……千秋売官販爵、聚貨累億……（中略）……博平令呉興聞人奭上疏曰、驃騎諮議参軍茹千秋協輔宰相、起自微賤、竊弄威権、衒売天官、其子寿鈴為楽安令、瞻私狼籍、畏法奔逃、竟無罪罰、傲然還県、又尼姙属類、傾動乱時、殺賤人餞、流殯不絶、由百姓単貧、役調深刻」（『晋書』巻六十四簡文三子伝）

⑥『晋書』巻六十四簡文三子伝

⑦「元顕寵倖張法順、每宴会、坐起無別、（司馬）尚之入朝、正色謂元顕曰、張法順駆走小人、有何才異、而暴被拔擢、当今聖世、不宜如此、元顕默然」（『晋書』巻三十七宗室伝）

⑧注⑤参照。

⑨「于時朝政既紊、左衛領営将軍会稽許栄上疏曰、……（中略）……又侵漁百姓、取財為惠、亦未合布施之道也」（『晋書』巻六十四簡文三子伝）

四　王恭の乱と土豪層

この様な東晋末の状況に対して改革を目指す動きはまず北人貴族内部から起った。その中心となったのが、司馬道子の佞臣の王国宝と同族であった王恭である。司馬道子の権勢が孝武帝を凌ぐに至ると、孝武帝はこれに対抗するために、人望の高い王恭と殷仲堪の二人の北人貴族を選んで地方へ派遣し、北府・西府（揚子江中流域方面軍）の二大軍団をそれぞれ統率させて道子一派を牽制した。だが孝武帝がまもなく死ぬと中央では道子一派の専横が一層ひどくなり、それにつれて両者の対立も深まった。そして、ついに隆安元年（三七七）四月、道子側近によって王恭暗殺計画が企てられるに及び対立は爆発し、王恭は北府軍をバックに王国宝ら君側の奸を除くことを名目として挙兵した。その結果、軍事力で圧倒的に劣る道子側が王国宝・王緒兄弟を誅殺し、失政を詫びたことで王恭も兵を引き、事態は収拾された。①

しかし、東晋の国家経済を支えてきた三呉（江蘇省南部・浙江省北部）では更に過激な動きが起っていた。この時母の喪に服して呉郡にいた王導の孫王廞は、前呉国内史で会稽の名族虞嘯父を通じて呉興・義興で兵数万を聚め、②また、娘を中心に南人土豪顧悛の妻孔氏ら江南有力者層の婦人からなる軍隊を組織して王恭の動きに呼応した。③三呉の土豪・民衆は

この挙兵に積極的に参加して当るべからざる勢いがあり、とても王氏兄弟の誅殺ぐらいで満足するものではなかった。王恭が彼等に対して兵の解散を命ずると、彼等の攻撃の矛先は盟主であるはずの王恭に転じられた。だが、王恭の部下劉牢之によってその動きは鎮圧され、この三呉における活動も結局葬り去られた。④

一方、暫くなりをひそめていた道子一派も、まもなく王恭・殷仲堪らの方鎮勢力の切り崩しに出てきた。これに対して王恭は、翌隆安二年七月、切り崩し政策の推進者司馬尚之、王愉の処罰を要求して、西府軍の殷仲堪・桓玄と共に再度挙兵した。しかし今度は劉牢之の寝返りによって反乱は失敗し、王恭も斬罪に処せられた。又、西府軍も、殷仲堪とその麾下の桓玄との不和に乗じた司馬元顕の策略によって分裂し、兵を引かざるを得なくなった。その上、第一回目の挙兵では王恭に呼応する動きのあった三呉でも、後に民衆反乱の指導者となる孫恩の叔父孫泰が、義軍数千を聚め、道子の陣営について戦っている。この義軍には三呉の土豪・民衆が数多く参加していたと推測される。⑤つまり、一回目に王恭の側にたって戦った三呉の人びとが二回目には掌を返す様に王恭を討つ側にまわったのである。換言すれば、王恭への期待は失望、憎悪へと変化したといえよう。これはいったい何に起因するのであろうか。

そもそも王恭は孝武帝の皇后の兄で「少くして美誉有り、清操人に過ぎ、衆人の期待を荷って政治の舞台に登場している。そして、北府軍団の長となって以後も呉興の名族沈警・穆夫父子を礼を尽して幕下に招聘するなど、⑥三呉の人びとの支持を得ようと気を配っていた。だがその政治については次の様に記されている。

性為るや弘からず、以て機会に闇し。北府に在るより、簡恵を以て政を為すと雖も、然れども自ら貴を矜り、下と殊隔す。兵を用うるに閑わず。尤も仏道を信じ、百姓を調役して仏寺を修営するに、壮麗に務め、士庶怨嗟す。（『晋書』巻八十四王恭伝）

つまり、貴族としての誇りが部下との意志疏通を妨げ、軍事・行政能力の不足となって顕れた。加えて、自分が信奉する仏寺の修営という私事に、こともあろうに郷村社会の破壊を招いた原因である徭役を利用している。だが、さらに重要なのは東晋中央政権に対する弱腰である。彼は挙兵の際王氏兄弟や司馬尚之らの司馬道子側近を除くことを名目とし、攻

撃の矛先を元凶の司馬道子にまで及ぼしていない。中でも一回目の挙兵などは側近の王国宝らの処分で道子側と妥協し、より過激な動きに出た三呉の土豪・民衆を弾圧してしまった。

この様な王恭の態度は、国家機構を利用した権門層の兼併に苦しみ、東晋政権に強い不満を抱いていた南人土豪・民衆の求める指導者像とは程遠い。結局彼は東晋末の混乱を救おうとしながらも、名門貴族の地位に甘んじ、郷村社会から沸き上る南人土豪・民衆のエネルギーを汲み取ることができなかった。これこそ王恭が郷村社会の支持を失なった原因であろう。かって川勝氏は王恭の乱においてキャスティング・ヴォートを握っていたのは北府寒門武人であると指摘したが⑦、こうみてくると、南人土豪・民衆が反乱に与えた影響も無視できない。

こうして反乱は失敗したが、その結果北府軍内では劉牢之をはじめとする寒門武人、西府軍内では桓玄一派というようなより強力で文人貴族的色彩の薄い軍事勢力が登場し、地方軍団の独立化が進んだ。それにより中央政権は「政令の行なわる所は唯三呉のみ」という完全な孤立状態に陥った。⑧にもかかわらず司馬道子一派の収斂は一向にやまず、残された三呉の地が集中的に権門の搾取にさらされたと思われる。この様な中で、北人貴族内部からの改革運動に失望した郷村社会に住む南人土豪・民衆は自ら反乱に起ち上った。これが孫恩・盧循の乱である。

① 本章における反乱の経過は『晋書』巻六十四簡文三子伝、巻七十五王湛附伝国宝伝、巻八十四王恭、殷仲堪伝等を参照してまとめた。なお本稿では紙幅の関係上、原文の引用を最小限にとどめた。

② 『晋書』巻六十五王導附伝廞伝、とろこで、王廞の父王薈は呉郡太守の時大饑饉に遭い、「私米を以て饘粥を作り、以て飢うる者る飴」った。(『晋書』巻六十五王導附伝薈伝) 王廞の挙兵の際も父時の私的な恩義関係が生きていたのではあるまいか。

③ 「琅邪王廞於呉中為乱、以女為貞烈将軍、悉以女人為官属、以孔子為司馬」(『宋書』巻八十一顧琛伝)

④ 『晋書』巻六十五王導附伝廞伝

⑤ 「王恭之役、(孫)泰私合義兵、得数千人、為国討恭」(『晋書』巻一百孫恩伝)。この義兵は、「泰見天下兵起、以為晋祚将終、乃扇動百姓、私集徒衆、三呉士庶多従之」(同前) という記事から考えて三呉の土豪・民衆が中心であったと思われる。

⑥ 「(王恭) 与(沈)警有旧好、復引為参軍、手書慇懃、苦相招致……(中略)……(沈穆夫) 王恭命為前軍主簿、与警書曰、足下既執不拔之志、高臥東南、故屈賢子共事、非以吏職興之也」(『宋書』巻一百自序)

⑦ 川勝義雄「劉宋政権の成立と寒門武人」(前出)

⑧ 『魏書』巻九十六司馬叡伝

五　孫恩・盧循の乱と土豪層

隆安三年（三九九）、東晋中央政権は強大化した地方軍閥勢力に対抗するため、「東土諸郡の奴を免れて客と為る者を発し、号して楽属といい、京師に移置して以て兵役に充」てた。その結果「東土囂然とし、人命に堪えず、天下之に苦し」[1]んだ。この混乱に乗じ杭州湾附近の海島で反乱を起こし、杭州湾南岸を席巻し会稽を占領したのが、天師道教団の教祖孫恩である。これに呼応して会稽、呉郡、呉興、臨海、義興、永嘉、東陽、新安の八郡では数十万の人びとが地方官を殺し反乱に起ち上った。その際指導的役割を果したのが会稽の謝鍼、呉郡の陸瓌、義興の許允之、呉興の丘尼、沈穆夫らの南人土豪とみられる人びとである。[2]反乱軍は民衆の自発的参加を得て凄まじい勢いで破壊活動を行い、多くの地方官や名門貴族を殺戮した。[3]反乱軍は劉牢之ら北府寒門武人の活躍により一まず海島へ押し戻されたが、二十万人にふくれあがった反乱軍はその後も杭州湾岸各地を攻撃し、隆安五年には首都建康へ迫る。結局反乱は劉牢之、劉裕の率いる北府軍との激しいせめぎあいの末、翌元興二年官軍に追いつめられた孫恩の自殺を以て一段落する。

ところで、この反乱の中核となった天師道教団は孫恩の叔父孫泰の代から活発な活動を行なっていた。孫泰の教団は三呉の土豪・民衆の間にも広く浸透し、既述の通り孫泰もこれを背景に軍事活動を行っている。彼はその後も東晋衰亡を予測して三呉の人びとを中心とした軍事集団を組織した。だがこれが会稽の土豪謝輶によって反晋活動として摘発されるや、教団は弾圧され孫泰も殺されてしまった。この教団の余党百余人が孫恩に率いられ海島に逃れて、孫恩の乱の中核となる集団を形成したのである。孫恩の乱は隆安三年、南人土豪に率いられた民衆の大量の参加をえて、爆発的に拡大したが、そこには三呉の人びとの支持をえた孫泰の活動が伏線をなしていたのである。

反乱は孫恩の死後も孫恩の妹婿盧循によって受けつがれた。反乱軍はその後五年間にわたって今日の広東省一帯を占領し、義熙五年には北府軍の北伐の隙を衝いて再び揚子江流域を席巻し、疾風怒濤の如く建康へ攻め寄せた。だがこの時、

かって反乱に参加した一部の土豪は劉裕の下に帰順し、三呉でも反乱に呼応する動きはなく、すばやく建康へ舞い戻った劉裕によって反乱は鎮圧された。こうして十三年間江南全土にわたって繰りひろげられた大反乱も終止符を打った。

この反乱は参加者の多さ、期間の長さ、地域的広がり、どれをとっても中国史上有数の大民衆反乱といえよう。だが民衆反乱としては土豪が重要な役割を果していたことにこの反乱の一つの特徴がある。この事実をどう解釈するかをめぐって、六十年代の中国を中心に反乱の性格についての論争が戦わされた。[4] だがこれまで述べてきた様ないくつかの点、すなわち民衆と南人土豪が郷村社会を媒介として密接な関係にあり、共にその安定を冀求していたこと、東晋末には国家機構を利用した権門の収奪により郷村社会の主要構成員たる小農民の生活が脅かされていたこと、そして反乱の直接の原因が国家権力の兵役強化にあったこと等を考え合せると、この反乱は南人土豪と民衆が東晋権力に対し共同して闘ったものといえよう。[5]

前述の通り、東晋末の郷村社会は国家機構を媒介とした権門の収奪に苦しんでいた。王恭ら貴族内部の改革派は反乱を起したものの結果として何事もなしえなかった。南人土豪・民衆は自ら事態の打開を求めて起ち上ったのである。だがその結果郷村社会は徹底的に破壊され大混乱に陥った。勿論、南人土豪の中にもこの様な過激な動きに同調せず反乱側と戦った者もいる。しかし、ともかくこの時郷村社会の現政権に対する不満は頂点に達し、社会の安定を望む声が極めて大きかったことは確かである。この問題は反乱によっても結局解決されなかった。この不満を解決し、反乱による疲弊を救うには、もはや川勝氏が東晋建設期について指摘した様な、伝統的権威や文化的先進性を誇り政治的文化能力にたよる貴族の力量では不十分であった。この反乱を境に、建康の中央政権の主宰者は文化的能力を具えた者よりもむしろ軍事的能力に秀でた者へと変化する。こうして登場したのが桓玄であり劉裕である。

① 『晋書』巻六十簡文三子伝

② 会稽の謝氏、呉郡の陸氏、義興の丘氏、沈氏は共に江南の名族である。しかし、沈穆夫以外は出自が明らかでなく、彼等を土豪とすることを疑問視する説もある。だが二章でも述べた通り、南人土豪が混乱時に起兵する例は多く、彼等が南人土豪である可能性は極めて高い。

③ 「於是会稽謝鐵、呉郡陸瓌、呉興丘厖、義興許允之、臨海周胥、永

嘉張永、及東陽新安等凡八郡、一時俱起、殺長吏以応之、旬日之中、衆数十万、於是呉興太守謝邈、永嘉太守謝逸（ママ）、嘉興公顧胤、南康公謝明慧、黄門郎謝沖、張琨、中書郎孔道、太子洗馬孔福、烏程令夏侯愔等皆遇害、……（中略）……諸賊皆燒倉廩焚邑屋、刊木堙井、虜掠財貨、相率聚於会稽、其婦女有襁褓不能去者、褰裳盛嬰児投於水、而告之曰、賀汝先登仙堂、我尋後就汝」（『晋書』巻一百孫恩・盧循伝）以下ことわらぬ限り本章の記述は同伝による。

④ 主要論文を挙げると、范文瀾『中国通史簡編』修訂本第二編（人民出版社刊、一九四九）、段昌同「東晋政権的衰亡与孫恩・盧循的起義」（『歴史教学』一九五四、十二期）、馮君実『晋書孫恩・盧循伝箋証』（中華書局刊、一九六三）、張一純「談孫恩・盧循領導的農民起義」（『中国農民起義論集』北京三聯書店刊所収、一九五八）、謝天佑「試論孫恩・盧循起義的性質」（『新建設』一九六二、二期）、楊偉立「関于孫恩・盧循起兵的性質」（『歴史教学』一九六三、五期）、朱大渭「孫恩・徐道覆起義的性質及其歴史作用」（『歴史論叢』第一輯、一九六四）、曹永年「試論東晋末年農民起義的変質」（『歴史研究』一九六五、二期）等がある。変質を最も明確に打ち出す謝、馮・曹の各氏は、反乱は民衆が孫恩や南人土豪をつき上げる形で起ったが、指導者達は次第に民衆を押えてヘゲモニーを確立し、反乱の性格を変質させたとする。その際南人土豪は民衆の利益と相反する行動をとり、反乱に悪影響を与えたとされる。又、変質はなかったと説く張氏も民衆が南人土豪を甘く見たのが反乱失敗の原因だと述べる。変質論争では、反乱が最後まで民衆主導で戦われたかそれとも途中で敵対する階級の出身の指導者グループにヘゲモニーを奪われたのか、又、奪われたとしたらその時期はいつからか等が争点となった。この様な論争が起った背景には、民衆と南人土豪が本来相対立すべき階級であるという考え方がある様に思われる。日本でも奈良松子（「東晋末年反乱ノート」『中国農民戦争史研究』三、一九七一）、鈴木中正（『中国史における革命と宗教』第三章、東京大学出版会刊、一九七四）の両氏が指導者層と民衆とのギャップについて論じている。この様な論争のもつ意味、反乱と宗教等の問題については別の機会に論じてみたい。

⑤ この反乱は本来国家が具有すべき公共性を失なった国家権力と、その収奪に苦しむ郷村社会との矛盾の結果起った反乱である。従って、六十年代の中国の様に郷村内部の生産関係の矛盾から生じた階級闘争としてのみ論ずるには無理があろう。

六　桓玄の簒位と土豪層

桓玄の父桓温以来西府軍は桓氏の私兵集団と化する傾向にあったが、東晋末に至り桓氏が軍団長の地位を奪われてからは桓玄も不遇をかこっていた。だが彼は王恭の乱の中で頭角を顕わし、ついには前軍団長の殷仲堪、雍州の長官楊佺期を倒して楊子江中流域を一手におさめ、中央政権をも凌ぐ勢力を有するに至った。時に首都建康は孫恩の乱によって大混乱に陥っており、これを救い政治を正すことを口実に、桓玄は自ら西府軍団を率いて建康へ攻め上った。①

以前から司馬道子の政治責任を鋭く問うていた桓玄は[2]、建康に入城するや司馬道子・元顕及びその側近を粛清し政治を刷新した。これは長く続いた戦乱に厭き平和を冀求していた建康の人びとから大いに歓迎されるところとなった。ここで注目すべきは、その背景に武力という強権があってはじめてそれが可能だったことである。しかし彼は逆にその力を恃み、朝廷を悔り高官を幽閉したりする様になった。その上生活が奢侈に流れ、政務もあらゆる点で煩雑となったので、民間でも不満が高まり、再び社会に動揺が生じてきた。それに追い打ちをかける様に、元興元年七月、大饑饉が三呉地方に起った。そのため「人びと相い食み、浙江以東、流亡するものは十に六・七、呉郡、呉興は戸口半を減ず。又、流奔して西する者は万もて計(かぞ)う」という事態が生じた[3]。そこで桓玄は救荒策を講じたが末端まで徹底しなかった。この時地方官が江湖の資源にたよって飢えをしのいでいる人びとをもとの地へつれ戻したり、食料を十分に分配しなかったりしたため混乱は助長され、路上にはゆきだおれが相い次いだ。このことはおそらく三呉の人々の桓玄に対する不信感を増大させる結果になったに相違ない。

奢侈生活と政治の煩雑さは桓玄が簒位を企てるに及んで激しさを増し、政策も朝令暮改を繰り返した。その代表的なものが肉刑の復活と銭貨の廃止である。肉刑の復活は死刑を罷めて足首切断の刑に代え、天下に徳治のゆきわたっていることをアピールせんとするものである。これに対し、会稽の土豪孔琳之は、当面の最大の社会問題は編戸の逃散であり、それを防止するためには厳罰主義で臨まなければならない。肉刑を復活し刑罰を軽くすることは、この逃散防止に逆効果であると反対した。又、桓玄は慢性的な銭貨の不足を一気に解決すべく、中国古来の農本主義的思想にもとづき、銭貨を廃止し穀帛を貨幣として用いることを提案した。これについても孔琳之は、銭が現実に交易手段として十分に機能し、その弊害も見られないことを、その廃止により社会の大混乱が予想されること、現在の社会混乱の原因は戦乱や饑饉が引きつづいたことにあってその対策が先決であること等を指摘しこれを批判した[4]。この様に人心の収攬をはかったこれら桓玄の政策は社会の現状を無視したものであった。その結果、これらは南人土豪の激しい反発を招き、朝議の賛同も得られずに

終った。

元興二年（四〇三）桓玄が晋の安帝を廃して帝位につくと、彼は自ら中央の実権を握り、従兄桓謙を輔佐とし、桓石康に西府を、桓脩に北府を統轄させるなど桓氏一族を要所に配し、ブレーンを卞範之、殷仲文、刁逵等の北人貴族で固めた。だがこの政権の枢要にある者は、又もやかっての司馬道子一派や王恭と同類の所業におちこんだ。すなわち桓玄自ら他人の宝物、珠玉、法書、好画、佳園等をばくちでまきあげたり、「臣佐を遣わし四出」せしめて、珍貨とみれば無理矢理自分のものにしたほか⑤、「盛んに館第を営み、自ら佐命の元勲を以て深く矜伐を懐き、富貴を以て人に驕」った卞範之⑥、「佐命の親貴を以て、厚く自ら封崇」し、「多く貨賄を納め、家は千金を累ぬれども、常に足らざる若」しという殷仲文⑦、「奴客縦横、山沢を固吝し、京口の蠹と為」った刁逵⑧の様に、自己の権力をかさにきた「権門并兼」そのものの生活を送っていた。

この様な桓玄政権がいつまでも江南の土豪民衆の支持を得られるはずはなく、「百姓は疲れ苦しみ、朝野労瘁し、怨怒して乱を思う者は十室に八・九」に至り⑨、ついには三呉の土豪中最大の実力者、会稽の孔季恭までもが劉裕の反桓玄クーデター計画に関与しだした⑩。一方、北府軍内でも桓玄によって劉牢之以下主だった将軍が殺されたり、国外へ追放されたりした。北府軍内の動揺と社会の不満に乗じた劉裕は元興三年、何無忌、劉毅、諸葛長民、孟昶、檀憑之、檀韶、孟懐玉、向靖、魏詠之等所謂北府寒門武人の中堅将校クラスの面々と共に京口において反桓玄クーデターを決行し、建康を占領した。つづいて西府軍の本拠地荊州へ軍を派遣して桓氏一族を滅し、残党は華北に亡命した。こうして劉裕は今や政権担当能力を喪失した北人貴族に代り実質上の東晋政権の主宰者となった⑪。

① 本章の記述は主として『晋書』巻九十九桓玄伝による。

② この問責の書簡は『晋書』巻六十四簡文三子伝に載る。

③ 『晋書』巻十三天文志下

④ 「桓玄時議欲廃銭用穀帛、琳之議曰……（中略）……穀帛為宝、本充衣食、今分以為貨、則致損甚多、又労毀於商販之手、耗乗於割截之用、此之為敝、著於自曩、……（中略）……且拠今用銭之処不為貧、用穀之処不為富、又民習来久、革之必惑、語曰、利不百、不易業、況又銭便於穀邪……（中略）……頃兵革屢興、荒饉荐及、飢寒未振、実

此之由……（中略）……愚謂救弊之術、無取於廢錢、玄又議復肉刑、琳之以為……（中略）……又今之所患、逋逃為先、歴叛不革、逃身廢所、又以肅戒未犯、永絶悪源」（『宋書』巻五十六孔琳之伝）

⑤『晋書』巻九十九桓玄伝

⑥『晋書』巻九十九卞範之伝

⑦『晋書』巻九十九殷仲文伝

⑧『晋書』巻六十九刁協附伝達伝

⑨『晋書』巻九十九桓玄伝

⑩「高祖後討孫恩、時桓玄篡形已著、欲於山陰建義討之、季恭以為山陰去京邑路遠、且玄未居極位、不如待篡逆事彰、釁成悪稔、徐於京口図之、不憂不剋、高祖亦謂為然」（『晋書』巻五十四孔季恭伝）

⑪『宋書』巻一武帝紀上、等参照。

七　劉裕政権と土豪層

ところで劉裕が初めて歴史の舞台に登場したのは孫恩の乱の時である。この反乱は一方で徹底的な破壊活動をともない、政府軍による秩序回復を願う者も多かった。しかし、そこにやって来た劉牢之等の軍は軍紀が乱れ略奪を恣にし、人々の失望とうらみを買った。[1] その中にあって劉裕の軍のみは紀律正しく、人の財産を侵す様なことはなかった。そこで、父穆夫が反乱に参加したため自らも追われる立場にあった沈林子は、一党を率いて劉裕の下へ訪れ保護を求めた。劉裕は彼等を手厚くもてなし、以後呉興の大族沈林子・田子・淵子兄弟、及びその一党は劉裕配下の最も忠実な部将として活躍する。[2] 又、劉裕麾下の名将会稽の孫季高もこの時劉裕の軍に身を投じ、[3] 先述の孔季恭もしばしば会稽にやってくる劉裕を歓待している。[4] この様に劉裕はその登場の時から秩序回復の期待を荷い、三呉の土豪たちの厚い支持をえていた。

彼は政権を握ると、東晋末の社会問題、つまり権門の国家機構を利用した収奪とそれによる過重な徭役が主たる徭役負担者である江南土着の小農民の生活を脅かすという事態に対し、次々とこれを改善する政策を実行した。

まず権門の跳梁を生む土壌となっていた官僚の綱紀の緩みに対しては、クーデターを起すやいなや「身を以て物（よのかと）の範たりて、先づ以て内外を威禁」した。これにより「百官皆粛然として職を奉じ、二・三日にして風俗頓（とん）に改」まったという。[5] そして今まで兼併を行ってきた桓氏一族は勿論、殷仲文、卞範之、王愉、王綏等を粛清した。その中でも「京口の

蠹」といわれた刁氏一族については「其の資蓄を散じ、百姓をして力を称りて之を取らしめ」ている。[6] さらに、疲弊した民衆にはこの様にして没収した権門の資産を分配したほか、「臨沂、湖熟の皇后脂沢田四十頃を罷め、以て貧人に賜い、湖池の禁を弛」める等、[7] 国有財産の放出を行って生活の安定をはかった。又、クーデターの直後に「軍戸を免」じて、遂成県や建熙県を建てたり、[8] 義熙十年（四一五）には「民を息ませ役を簡く」等、[9] 賤民化しつつある兵戸（軍戸）の解放や税役の軽減など、民衆の負担を軽くせんとする政策をたびたび実行した。

けれども、徭役制度の抜本的改革は義熙土断の断行なしには行なわれえなかった。

孝武帝の太元年間北人貴族の范寧は、東晋政権が華北からの流民に対し「旋反の期（帰郷の機会）有るを庶い、故に其の本郡を〔戸籍に〕挾注するを許」したことにより、華北出身者の白籍と江南土着民の黄籍という二種類の戸籍が生じ、それが社会の混乱の原因となっていることを指摘し、「其の封疆を正し、土を以て人戸を断じ、考課の科を明らかにし、閭伍の法を修」めることを建策した。[10] この「土を以て人戸を断」ずること、すなわち、現住所をその本籍地として黄白二つの戸籍を統一することが范寧が建策した土断の趣旨である。土断は東晋成立以来しばしば行なわれた。中でも桓温が行なった庚戌土断は最も効果が上ったという。しかし、范寧が上奏した当時は司馬道子によって乱れた政治が行なわれており、土断が実施される余地はなかった。

これに対して劉裕は最大の政敵劉毅をも倒して政治的地位を確立した義熙八年（四一三）、土断を実行した。それを求める上奏文では、定住定業の理念に基づく井田制が理想とされ、東晋成立以来、華北からの流民が住居も生業も定まらない（「民居未一」、「民無定本」）という現実と対比される。そして、この「雑居流寓して、閭伍の修まらざる」ことこそすべての社会問題の根源であるという認識に立って、桓温が行なった庚戌土断にならって土断を実施し、華北からの流亡民を現住地の社会にさまざまな形で関与させ（「与事」）、その土地に対する愛着心（「敬恭之誠」）をかきたてて定着化させる方向を示している。[11]

つまり、土断は華北からの流民の雑居流寓、及び黄白籍の存在という二つの社会問題を前提として議論されている。既に述べた通り白籍民は徭役を免除され、その負担は江南土着の黄籍民にしわ寄せされていたと思われる。とすれば、この二つの社会問題は特に江南の小農民を中心とする郷村社会へ多大の悪影響をもたらしていたと考えられる。すなわち、義熙土断とは白籍民を江南へ土着させて彼等の生活の安定をはかり、さらに黄籍民と等しく徭役を負担させることによって窮乏化しつつあった黄籍民をも救おうとするものであろう。そして、「君子は則ち士風の慨(なげき)有り、小人は則ち下役の慮を懐」いたという土断に対する北来の貴族や民衆の抵抗を劉裕が斥け、土断を実行して江南の郷村社会の安定をはかったことにも、この土断の大きな意義が認められよう。しかし、どちらかといえば、従来の研究は制度面を重視し、北人貴族の本貫の変化、国家権力の人戸把握といった点に力点が置かれ、[12] 最も土断の必要にせまられている郷村社会との関係ではあまり論ぜられてこなかった様に思われる。

以上は国家権力を媒介とした収奪に対しての措置といえよう。しかし、徭役労働力を奪い、小農民の生活を脅かす要因は郷村社会内にもあった。これが蔵戸の問題である。蔵戸は戸籍を逃れ保護を求めてきた良民を有力者が不法に蓄えることによって生じた私属民である。これに対し劉裕は義熙七年、「復た亡命千余人を蔵匿」した会稽内史の司馬休之を罷免した。[13] 蔵戸についてはすでに述べた通り、東晋政権も今まで強硬手段に訴えることなくむしろ黙認している。しかし、孫恩の乱とその後の饑饉によって三呉の土豪たちも大打撃を受けた。それに乗じた劉裕はこの問題を一気に力で解決したのである。彼が郷村内部の矛盾を力で解決したことは、義熙九年に「山湖川沢、皆豪彊の専らにする所にして、小民は薪採漁釣するに、皆税直を責めらる」という事態に対し、「之を禁断」したことにも窺われる。[14] 越智氏はこの様な土断を含む一連の政策を通じて劉裕が全南人土豪層と対峙していったとする。[15] だが私はこれを劉裕が自分の郷村社会安定政策に対立する一部の南人土豪を力で押えたものであって、南人土豪全体と対立するものではなかったと考える。

事実、劉裕政権の成立後、前述の沈氏、孔氏、孫氏の劉裕に対する支持は一層深まっている。更に呉郡の名族張氏についてみると、張邵は劉裕と劉毅の政争に際し「主公(劉裕)は命世の人傑なり、何ぞ多問を煩わん」と劉裕に対する支持を表明し[16]、劉毅には見向きもしなかった。又、兄の張茂度も劉裕と東晋宗室最後の有力者司馬休之との戦いでは、司馬休之の幕僚でありながらも、小船で司馬休之の所から劉裕の下へ駆けつけている[17]。この様に呉郡の張氏も劉裕政権が確立する過程で劉裕に深く肩入れしている。つまり、劉裕政権と南人土豪の関係はむしろ親密の度を加えていったのであって、全面的に対立していったとはいい難い。

ところで、この沈氏に代表される南人土豪の劉裕政権への参加について、川勝氏は「かれらが地方にもつ豪族的基盤と直接関係なく、もっぱら個人の才幹において、個々の寒門武人として、劉裕政権の軍事体系の中へ吸収されていった」と解釈する[18]。だが実際には、沈林子が劉裕に投降した時は「老弱」を引きつれており、南燕遠征の時も「宗人」沈叔長が一緒に従軍している[19]。又、沈田子が後秦遠征に参加した時も「江東の勇士」を領して戦功をたて、「宗人」沈敬仁に軍中で対立していた王鎮悪を殺させている[20]。つまり、沈林子や沈田子が遠征に従軍する時は、「宗人」や「江東の勇士」を率いていたのである。とすると、彼等は劉裕政権に個々の寒門武人としてではなく、在地における勢力を背景として参加したと考えられる。換言すれば、劉裕は南人土豪一個人を配下に組み入れただけでなく、彼等を通してその背後にある江南の郷村社会全体を掌握したのである。そしてこれは彼の一連の郷村社会安定策の結果得られた南人土豪の支持によるものであろう。越智氏が劉裕と対峙したとする南人土豪は、この郷村政策に反対して割拠をつづけようとした連中ではあるまいか。そうした一部の連中を力で押え、他方郷村社会安定策によって南人土豪を媒介にその下にある郷村社会全体を掌握すること、劉裕はこの剛柔二方針を併用して東晋南朝貴族制の経済基盤となる江南郷村社会を完全に支配下に置いたといえるだろう。郷村社会とそれをリードする南人土豪のこの様な支持は、王恭の乱の時も桓玄の簒位の時も見られなかった。しかるに劉裕は、その郷村社会安定政策を通じて南人土豪の支持を得、一方でそれに反対する土豪層を力でねじ伏せ、東晋政

権に於いてもかって見られなかったほど完全な形で郷村社会を掌握した。このことこそ、彼が東晋末の混乱の中からぬきんでて宋王朝を開き、強力な南朝型皇帝権を確立しえた大きな原因ではあるまいか。郷村社会のエネルギーを背景に王朝革命を成し遂げるというこの形は、以後、南朝の王朝交代期に一層顕著になる。[21]その意味で晋宋革命は南朝型王朝革命の先駆的存在といえよう。

けれども、南人土豪が政権内で高い官職につくことはなかった。この事実によって越智氏等は劉宋政権成立過程で南人土豪が政権から排除されていったとする。[22]確かに孔季恭は尚書令、特進、開府儀同三司等の極めて高位の官職を授けられながらも最後までこれを受けなかった。だが劉裕に京口で反桓玄クーデターを起す様勧めたのは彼である。[23]又、張邵は劉裕の幕下にあって、政務一切を取りしきる劉穆之と並ぶ信任を受けて「大臣の体」があり、劉義隆（後の文帝）が西府軍団の長官となった時は司馬となって、「衆事悉く（張）邵に決」したという。[24]そして、沈林子は母の喪にあい、鎮西諮議、建威将軍、河東太守の官を退いた時でも、軍国の大事はすべて諮問された。また、宰相である謝晦の病気・服喪の際は当時領軍将軍であった彼がその代行をつとめた。この様に南人土豪は官位こそ高くはなかったが、劉裕の信任の下で極めて大きな実権を握り、政策決定に影響力を持っており、政権から排除されていったとは考えられない。郷村社会をバックとする彼等がこの様な形で政権に参加したことは、その後の南朝諸政権における沈氏・張氏の活躍や寒門寒人の台頭の先駆現象として注目される。またそれは、従来から南朝の政治的特色といわれてきた、貴族勢力に対する皇帝権の地位強化をもたらした原動力として、重要な意味がある様に思われる。

① 「初三呉困於虐乱、皆企望（劉）牢之、高素等、既至、放肆抄暴、百姓咸怨毒失望焉」（『魏書』巻九十六司馬叡伝）

② 「劉牢之、高素之徒、縦於其下、虜暴縦横、独高祖軍政厳明、無所侵犯、林子自帰曰、……（中略）……今日見将軍伐悪旌善、是有道師、謹宰老弱、帰罪請命、因流涕哽咽、三軍為之感勧、高祖奇之……（中略）……乃載以別船、遂尽室移京口、高祖分宅給焉」（『宋書』巻一百自序）

③ 「高祖東征孫恩、（孫）季高義楽随」（『宋書』巻四十九孫処伝）

④ 「高祖東征孫恩、歴至会稽、季恭曲意礼接、贍給甚厚」（『宋書』巻五十四孔季恭伝）

⑤『宋書』巻一武帝紀上
⑥『晋書』巻六十九刁協附伝逵伝
⑦『晋書』巻十安帝紀
⑧『宋書』巻三十五州郡志一
⑨『宋書』巻二武帝紀中。その他、義熙八年劉毅討平後、十一年司馬休之討平後、永初元年皇帝即位の時に免役、減税、救邺等の策がとられている。（同前、中・下参照）
⑩『晋書』巻七十五范汪附伝寧伝。なお紙数の都合上原文の引用は省略する。
⑪『宋書』巻二武帝紀中。同じく原文の引用は省略。
⑫ 主要な研究には越智重明「劉裕政権と義熙土断」（前出）、「東晋の貴族制と南北の『地緣』性」（『史学雑誌』六七―八、一九五八）、矢野主税「土断と白籍」（前出）、増村宏「黄白籍の新研究」（『東洋史研究』二―四、一九三七）、「東晋南朝の黄白籍と土断」（『鹿児島大学法文学部紀要』六、一九七〇）がある。越智、矢野両氏の義熙土断に関する見解は第一章で簡単に紹介した通りである。又、増村氏も流徙の人戸の安定と国家による把握を土断の目的としてあげている。ところで、各氏によって白籍と土断の内容についての詳細な検討がなされているが、見解にはズレがある。これらも含め土断については稿を改めて再論する予定である。
⑬『宋書』巻二武帝紀中
⑭ 同　前
⑮ 越智重明「劉裕政権と義熙土断」（前出）
⑯『宋書』巻四十六張邵伝
⑰『宋書』巻五十三張茂度伝
⑱ 川勝義雄「劉宋政権の成立と寒門武人」（前出）
⑲「初（慮）循之下也、広固未拔、循潛遣使結林子及宗人叔長、林子即密白高祖」（『宋書』巻一百自序）
⑳「姚泓欲自禦大軍、慮田子襲其後、欲先平田子……（中略）……（田子）乃棄糧毀舍、躬勒士卒、前後奮擊、所向摧陷、所領江東勇士、便習短兵、鼓譟奔之、賊一時潰散、所殺万余人」、「田子宗人沈敬仁、驍果有勇力、田子於（傅）弘之営内請（王）鎮悪計事、使敬仁於坐殺之」（同前）
㉑ 安田二郎「蘭遣成の革命集団」、「南朝の皇帝と貴族と豪族・土豪層」（共に前出）参照。
㉒ 越智重明「劉裕政権と義熙土断」、石田徳行「劉裕集団の性格について」（共に前出）
㉓『宋書』巻五十四孔季恭伝
㉔『宋書』巻四十六張邵伝
㉕「遭母憂、還東葬……（中略）……賜墨詔、朔望不復還朝、每軍国大事、輒詢問焉、時領軍将軍謝晦任当国政、晦每疾寧、輒摂林子代之」（『宋書』巻一百自序）

おわりに

以上、晋宋革命を江南の郷村社会との関係で考察してきた。どちらかといえば、従来の研究では貴族制最盛期に起ったこの革命を貴族や国家権力のサイドに重点を置いて考察し、郷村社会の役割を軽視してきた様に思える。だが、いかにこ

の時代が貴族制の最盛期であったとしても、その基底には郷村社会が確固として存在しており、どの様な政治権力もその支えなしには成り立ちえなかったのである。東晋末、権門の国家機構を利用した収奪によって郷村社会は疲弊し、東晋国家権力は郷村社会の支持を失っていった。そしてついに孫恩の乱に至り、郷村社会と国家権力は完全に乖離した。この情勢は名門出身の北人貴族の王恭や桓玄ではどうすることもできなかった。郷村社会の支持を回復し、社会を混乱から救ったのは、貴族からさげすまれていた一寒門武人出身の劉裕であった。この支持は、彼が桓玄を倒して以後行なった一連の郷村社会安定策に対して与えられたものであり、それが彼を皇帝に押し上げる原動力となったものではなかろうか。私は晋宋革命を推進し、新しい南朝型皇帝権力を生み出したエネルギーを江南の郷村社会に求め、それをリードした南人土豪の歴史的役割を評価したい。そして、この革命における南人土豪の活躍の中に南朝王朝革命の形態の先蹤が、また南人土豪の政権への参加のしかたの中に皇帝権の強大化と寒門寒人の活躍に象徴される南朝の政治構造の端緒が、それぞれ見い出せる様に思う。

ただ、本稿では触れることができなかったが、足手まといになる子供をかごに入れて水中に投げこみ、「汝の先に仙堂に登るを賀す。我尋いて後汝に就かん」と叫んで孫恩の乱に参加した婦人の姿をみた時①、東晋末には何か精神世界における大きなカタストロフィーが潜んでいた様に思われる②。又、晋宋革命を超えて貴族制が存続したことを考えると、貴族側にも混乱を乗り切る強靱な力があったとすべきであろう。さらに、本稿では大きく南人土豪と北人貴族とに分けたが、それぞれの内部にも激しい対立があったことが知られている③。これらの問題については今後の課題として検討してゆきたいと考える。

① 『晋書』巻一百孫恩伝

② 川勝義雄「中国前期の異端運動」（前出）等参照。

③ 南人土豪内部の対立については、大川富士夫「六朝前期の呉興郡の豪族」（『宗教社会史研究』一九七七）等参照。

（名古屋大学大学院生）

Le commerce hispano-américain et la France au XVIIIe siècle

par

Haruhiko Hattori

Il est certain que, dans la seconde moitié du XVIIe siècle, la France tenait parmi les puissances européennes le premier rang dans les exportations industrielles vers l'Amérique espagnole via Cadix. Quelle sera la part de la France dans ce domaine au cours du siècle suivant? C'est le problème que j'ai essayé d'élucider dans cet article.

En comparant pour le XVIIIe siècle le mouvement du commerce hispano-américain avec celui du commerce franco-espagnol, j'ai pu constater, d'une part la croissance presque séculaire des exportations de l'Espagne vers ses colonies d'Amérique, et d'autre part la croissance parallèle jusqu'en 1749-1756, puis le recul ou la décroissance après cette période, des exportations françaises vers l'Espagne, composées en majeure partie des produits textiles dont la presque moitié était normalement destinée à l'Amérique espagnole. De ces faits on pourrait conclure que la France, après avoir conservé jusqu'en 1749-1756 sa prépondérance dans le commerce hispano-américain, a vu sa position décliner, lentement d'abord, puis, après la fin des années 1770, à un rythme accéléré.

Social Change in the *Chin-Sung* 晋宋 Period and the *Chiang-nan* 江南 Rural Society

by

Kensuke Yoshimori

The *Chin-Sung* Revolution is a dynastic one which happened at the zenith of aristocratic society and brought about the change of regime from *Eastern Chin* 東晋 to *Sung* 宋. Up to the present it has been examined only from the side of the aristocracy and the state, and the movement of the rural community has been treated lightly. But the rural community played an essential part in the social change.

In the last stage of *Eastern Chin* the exploitation by the aristocracy from the north, for example *Ssŭ-ma Tao-tzu* 司馬道子, aggravated the complaint of the community, so that it provoked the insurrection of *Sun-Ên* 孫恩 and *Lu-Hsün* 盧循. While some leading aristocrats, such as *Wang-Kung* 王恭 and *Huan-Hsüan* 桓玄, attempted to reform the condition unsuccessfully, *Liu-Yü* 劉裕, an officer of humble origin, could accomplish the dynastic revolution, pressing the policy for stabilizing the rural community, such as *t'u-tuan* 土断, and thus winning the support of the powerful families in *Chiang-nan*.

After all it was the rural community that produced the imperial power of Southern Dynasties and in the process of social change the activity of the powerful families built the road to the political stage for the lower classes.

Die Entstehung der Märkte in Niederösterreich während des Mittelalters

von

Yoshihisa Hattori

Die Entstehung der geschlossenen Siedlungen, nämlich Angerdörfer (Dörfer mit vielförmigen Plätzen), Märkte und Städte in Niederösterreich seit dem 11. und 12. Jahrhundert weist einige Gemeinsamkeiten auf, denn sie stand mit der damaligen landwirtschaftlichen Entwicklung und Veränderung im Umkreis in engerer Beziehung und meistens waren diese Siedlungen mit einer Burg oder burgähnlichen Anlage als Kern ausgerüstet. In diesem Sinne muß die Entstehung dreier Typen der Siedlungen in Niederösterreich als nicht voneinander trennbare Erscheinungen betrachtet werden.

Märkte, die ich in dieser Arbeit behandele, bilden einen für Süddeutschland charakteristischen Typ der Minderstädte. Bezüglich ihrer Entstehung habe ich unter Verwendung von den landesfürstlichen Urbaren aus dem 13. und 14. Jahrhundert folgende Punkte feststellen können. Bei den meisten Märkten finden sich, wie schon gesagt, eine Burg oder andere burgähnliche Anlagen wie Hausberg oder Wehrkirche. Vor dem 11. Jahrhundert erfüllten diese Burgen nicht nur militärische oder po-